

「深川音頭」に思いを寄せて ～深川音頭継承の大切さ～

通洲会 社中 山本香代子



「深川」の名前の由来は、今から433年前（1590年）、深川八郎右衛門ほか、6名の人達によって開拓された土地が「深川村」と呼ばれるようになり、やがて「深川」と言う名前になりました。

当時の深川は海や川が近く、漁業も盛んに行われ、また水運の発達によって食料（米、塩）を保管しておく蔵（倉庫）や木材問屋の林場も並び、1627年には、富岡八幡宮が創建され、永代寺、正源寺など、お寺も多く集まっていました。

このように江戸初期の深川は、漁師町、蔵の町、木の町、寺の町として発展していったのです。

深川の町はこのような歴史背景から、橋の名前や特徴ある粋な町名も数多くありました。

例えば深川和倉町、深川亀住町、深川万年町、深川数矢町、深川黒江町・深川蛤町など、現在は区画整理に伴う大幅な町名変更や町名の簡素化により冠称「深川」が廃止され、歴史ある古くからの名前もなくなり、時代の移り変わりに伴って古き良き時代の深川の風情を感じる機会が少なくなったと実感しています。

そんな中、昔の深川を表現しているのが、深川音頭です。

深川音頭は、今から90年前、昭和8年12月（1933年）にコロムビアレコードから発売され、夏の盆踊りに欠かせない定番となっています。

最近の盆踊りは、団扇（うちわ）を使わない踊りがほとんどですが、深川音頭は団扇（うちわ）を使って踊ります。

冷房やエアコンの無い時代に団扇（うちわ）で涼をとっていた夏の光景が想像できます。

結い髪に浴衣、粋な町名で溢れていた頃の深川を表す深川音頭の歌詞には、江戸時代の深川の地名や情景が織り込まれ、繰り返される「吹けや汐風 深川音頭 辰巳よいところ ひと踊り」の「辰巳」は、江戸城の辰巳の方角に位置した「深川」のことで、深川が海に近く、風は海の汐風、場所は江戸城から東南方向の土地を辰巳と呼んでいたことに由来します。

また、三番の歌詞「見やれ 永代 勢（きを）いの猪牙（ちよき）で」の「ちよき」とは「猪牙舟（ちよきぶね）」のことで、速度の速い猪の牙のように先が尖った屋根のない細長い木の舟のことです。



江戸時代の猪牙舟（ちよきぶね）（深川江戸資料館 再現）

深川音頭は、一番から十番までありますが、盆踊りで歌われているのは五番までです。

臨海小学校の運動会では、通洲会永田通子会主のもと、毎年、子どもたちと一緒に深川音頭を踊っています。

今年は六年ぶりに富岡八幡宮例大祭が行われます。

神輿文化の継承はもとより、90年に及ぶ長い歴史のなかで踊り継がれてきた伝統ある深川音頭を後世に残すため、未来を担う子どもたちに深川音頭の継承の大切さを伝えていきたいと考えています。

深川音頭が愛され、踊り継がれることを願っています。

深川音頭 作詞 小川花佛 作曲 福田蘭童 歌手 桜子 深川音頭囃子連中

(一) 来たか踊り子 皆連れ立ちて 踊ろ朝夜(あさよ)の 更けるまで

(囃子) 吹けや汐風 深川音頭 辰巳よいとこ ひと踊り

(二) 月が出た出た 櫓(やぐら)の上に 昔なつかし 富が岡

(囃子) 吹けや汐風 深川音頭 辰巳よいとこ ひと踊り

(三) 見やれ 永代 勢(きを)いの猪牙(ちょき)で 急ぎゃ しぶきに 濡れ小袖(ぬれこそで)

(囃子) 吹けや汐風 深川音頭 辰巳よいとこ ひと踊り

(四) 並ぶ 米倉(こめぐら) 佐賀町市場(いちば) 浜の夕闇 はねる魚(うお)

(囃子) 吹けや汐風 深川音頭 辰巳よいとこ ひと踊り

(五) 昔偲べば ふと馴れ染めた 張りど意気地(いきぢ)の 辰巳河岸(たつみがし)

(囃子) 吹けや汐風 深川音頭 辰巳よいとこ ひと踊り

(以下六番から十番までは歌われておりません)

作詞 小川花佛(本名:海老原由二郎 明治34年5月19日深川門前仲町料亭小川家に生れる。)

深川音頭がデビュー作品

作曲 福田蘭童 ラジオドラマ「笛吹童子」のテーマ音楽を手掛けた

歌手 桜子

参考文献等

- 江東区の民俗 深川編 : 江東区教育委員会編集発行
- 論文 東京音頭の創出と影響-音響のメディア効果: 日本大学商学部准教授: 刑部芳則著
- タウン誌深川9号(1979年): (株)クリオ・プロジェクト発行
- 「大江戸音頭 深川音頭」: 江東区図書館貸出カセットテープによる歌詞カード
- 江戸時代の猪牙舟(ちょきぶね): 深川江戸資料館